

明治期後半における中学校の修学旅行

「書簡」〔明治三〇年代前半〕（当館寄託 廣田絹枝家文書四一六二三）

拝啓

進々春の嬉しき過ぎ去りて夏の日暮るも思はんす。諸々の山々益々緑うを、競ひ時鳥の聲は進之傳くを、奥原片登と般茶悦よわわ、吾れ中野寺に立ちて、諸事を取給れ久し水無き者、打過ぎ失礼の至り、諸事、只上様、入入營、以事、起居、如何遊されしか、何と迂生儀、日益々無事、壯健、三學事、務め居り、何の字意、下る候、おれ、おれ、おれ、おれ、四月廿五日、生誕を以て、三年、三月、伊香保、榛名、五年、四年は、仙台、松島、修学旅行も催し、吾等は、汽車、子、伊香保、向ひ前橋、下り下車、市街を過ぎて、歩行し、決川を経て、伊香保に至り、温泉、浴す、市街、八山、樓あり、翌廿六日、其れより、榛名山、向ひ途中、榛名湖とて、い、い、い、い、あり、其れ、少、高き、峠を、因、て、神社を、拜す、榛名、峠は、少し、離れて、山間、より、其、伊香保、歸り、翌廿七日、伊香保、出発、高崎、三、三、三、兵、隊、官、本、見、人、と、し、特務、総、長、能、く、世、謀、を、成、し、兵、士、の、練、習、五、か、器、械、運、動、等、を、見、了、前、日、吾、れ、只、上、様、の、事、を、作、思、ひ、出、さ、れ、る、其、れ、より、市、街、を、見、物

汽車にて前橋に至り、一泊、翌廿八日、少くも、同、汽車にて、通り、下車し、太田、向ひ、途、中、新、田、神、社、あり、少し、行、き、吞、龍、様、を、拜す、吾、新、田、所、も、多、か、其、水、より、高、山、神、社、を、拜す、又、歩、行、し、尾、利、に、至り、野、中、校、遺、蹟、を、見、了、前、日、の、事、を、思、は、し、其、日、汽車、を、行、く、新、田、に、至り、宇、陽、に、着、く、我、が、宿、舎、全、て、一、千、千、石、時、頃、より、前、と、思、は、れ、候、修学旅行も、終り、五月、十四日、運動會、有、之、り、門、前、より、大、志、の、緑、門、を、造、り、宿、舎、全、前、の、松、の、上、下、大、志、の、解、隊、様、を、揚、が、其、諸、所、之、繩、を、引、き、國、旗、を、下、げ、構、堂、の、屋、根、に

宿、舎、の、至、根、も、上、堤、の、周、り、も、國、旗、を、揚、げ、或、は、其、作、り、立、て、其、數、百、數、千、之、解、れ、り、と、思、ひ、外、其、他、輕、氣、球、大、旗、等、皆、各、級、及、公、寄、道、全、の、寄、附、に、寄、り、其、間、に、馳、せ、馬、古、野、州、界、に、入、り、お、れ、り、遊、覽、之、候、宜、し、稀、か、く、運動會、に、出、候、候、只、上、様、は、壯、健、に、御、家、の、為、め、も、力、を、盡、し、充、分、土、身、の上、は、帰、郷、お、ら、ん、と、祈、り、居、り、候、迄、生、も、此、度、及、第、の、上、特、待、生、に、お、れ、取、り、お、れ、お、れ、心、下、さ、れ、ま、し、先、は、粗、筆、を、呈、し、候、
五月十四日
敬具
栃木県第一中学校 宿舎全
廣田正四郎

只上様

【積文】

拝啓

追々春の嬉しさ過ぎ去りて夏の暑さに遇はんとする
諸々の山々益々緑りを競ひ時、鳥の聲は追々溥くなり
農事は益々繁忙に相成、吾れ中学に在りて諸事二
取紛れ久々御無音に打過ぎ失礼の至りニ御座候
兄上様には入営以来御起居如何遊され候か伺上候
迂生儀には益々無事壮健ニ学事ニ務め居り候間、御
安意下され度候、扱て我校にては四月廿五日出発を以て
三年二年ハ伊香保榛名に五年四年は仙台松瀧ニ
修学旅行を催し、我等は汽車にて伊香保ニ向ひ前
橋にて下車し市街を過ぎて歩行して渋川を経て
伊香保ニ至り温泉ニ浴す、市街ハ山腹交り、翌廿六日ハ
其れより榛名山に向ひ途中には榛名湖とていと大なる湖
あり、其少シ高き峠を過ぎて神社を拝す、榛名町は少し
離れて山間にあり、其伊香保ニ帰り翌廿七日伊香保
出発高崎ニ至り兵營を見んとす、特務総長能く
世話を成され兵士の練習及び器械運動等を見る時に
吾れ兄上様の事をば思ひ出されき、其れより市街を見物
し汽車にて前橋に至り一泊す、翌廿八日少しの間汽車に
て通り下車して太田に向ふ途に新田神社あり、少し行きて
吞龍様を拝す、吾祈る所も多かり、其れより高山神
社を拝す、又歩行して足利ニ至り学校遺蹟を見る時に
古の事を思はる、其レヨリ汽車にて行くこと暫くにして宇陽に
着く、我が寄宿舎に帰りしは午后十時頃なりと思はれ候
修学旅行も終り五月十四日運動会有之候、門前には
大なる緑門を造り寄宿舎ノ前の松の頂上には大なる聯隊旗
を揚げ、其より諸所ニ繩を引きて國旗を下げ、構堂の屋根も
寄宿の屋根も土堤の周りも國旗を揚げ、或は土ニ付き立て其数
實ニ数千ニ餘れりと思ひ候、其他軽気球大旗等皆各級
及び寄宿舎の寄附にて實に其間ニ馳せ周る、野州男子
も元氣ありしと覚え候、實に稀なる運動会に御座候
二伸

兄上様御壮健に國家の爲めに力を盡され充分立身の上御帰
郷あらんこと祈り居り候、迂生も此度及第の上特待生

に相成り候間、此又御安心下され度候、先は粗筆を呈し候

敬具

五月十四日

栃木県第一中学校寄宿舎

廣田正四郎

兄上様

【大意】

拝啓

徐々に春の陽気が過ぎ去り、夏の暑さがやってこようとしています。諸々の山々が益々緑を競い、鳥の声は徐々に大きくなっています。農業は益々忙しくなっています。私は中学でさまざまな事に

取り紛れ、久しく御無沙汰になってしまい失礼いたしました。兄上様は、入営以来の生活はいかがでしょう。

私はおかげさまで元気で、学業に励んでおりますので、ご安心ください。さて、我が校では、四月廿五日に出発し、

三年生、二年生は伊香保・榛名に、五年生、四年生は仙台・松島に修学旅行に行きました。私たちは汽車で伊香保に向い、

前橋で下車して市街を過ぎ、歩いて渋川を経て

伊香保に至り、温泉に入りました。市街地は山の中腹でした。翌廿六日はそこから榛名山に向いました。途中に榛名湖という大きな湖が

ありました。少し高い峠を過ぎて、神社に参拝しました。榛名町は少し離れて山間にありました。それから伊香保に帰り、翌廿七日、伊香保を

出発し、高崎に至り、兵営を見ました。特務総長がよく世話をしてくださり、兵士の練習及び器械運動等を見る時に

私は、兄上様の事が思い出されました。それから市街を見物し、汽車で前橋に至り、一泊しました。翌廿八日、少しの間汽車に

乗り、下車して太田に向う途中に新田神社がありました。少し進んで呑龍様（大光院）に参拝しました。私は祈ることも多かったです。それから高山神社

に参拝しました。それから歩いて足利に至り、学校遺蹟を見る時に、昔の事を思いました。それから汽車にしばらく乗り、宇都宮に

着きました。私が寄宿舎に帰ったのは、午後十時頃だったと思われます。修学旅行も終わり、五月十四日に運動会がありました。門前には

大きな緑門を造り、寄宿舎の前の松の頂上には大なる聯隊旗を揚げ、そこから諸所に縄を引いて国旗を下げ、構堂の屋根も

寄宿舎の屋根も堤の周りも国旗を揚げ、または土につき立て、その数実に数千以上もあると思われました。そのほか軽気球や大旗などが各クラス

や寄宿舎の寄附でつくられ、あちこちに上がっていました。野州男子も元気があった感じました。本当に盛況な運動会でした。

一伸

兄上様がお元気で国家のために力を尽くされ、充分出世してお帰りになることをお祈りしております。私もこの度及第の上、特待生になりました。ですからご安心下さい。乱筆で失礼いたします。

敬具

五月十四日

栃木県第一中学校寄宿舎

廣田正四郎

兄上様

【史料の説明】

本史料は、明治三〇年代前半の栃木県立第一中学校(現県立宇都宮高等学校)の生徒が寄宿舎から兄に宛てた手紙です。大半が修学旅行についての内容で、行程や見学先のほか、旅行先で感じたことなどが書かれています。手紙によれば、四、五年生は仙台・松島方面、また、自身は二泊三日の行程で、汽車を利用し伊香保・高崎・足利方面への旅行だったことがわかります。一、三年生が参加した修学旅行の行程を見ると、移動手段として汽車を利用しているものの、徒歩での移動も多かったことがわかります。見学先としては寺社や名所旧跡が中心ですが、兵營見学が組み込まれているのは興味深いところですよ(この書簡が書かれたのはちょうど日清戦争と日露戦争の狭間の時期にあたります)。

明治二〇年代に入ると学校教育制度も整備され、授業以外にも遠足や修学旅行、運動会などさまざまな学校行事が行われるようになりました。県内では明治二四年に栃木県尋常中学校(栃木県立第一中学校の前身)が全校生を四班に分けて鹿沼方面を中心とした修学旅行を行っていますが、内容には発火演習(※)が含まれていました。小学校でも明治二〇年代後半には修学旅行の記録が見られるようになりますが、実態としては行軍演習のように軍事的行事の例も多かったようです。このように、修学旅行という名称で発火演習を行ったほか、日帰り遠足も修学旅行と称するなど、行事の名称は明確に区分されず使用されてきました。明治三〇年代に鉄道が普及すると、鉄道を利用した社会科見学的な修学旅行が行われるようになっていきます。軍事的要素は薄れていき、行軍・発火演習は独立した軍事的行事として行われるようになりました。

本史料からは、当時の中学校における修学旅行の実情をうかがい知ることができます。また、手紙の後半では修学旅行後に行われた運動会についての記述があり、当時の生徒にとっても修学旅行や運動会などの学校行事が楽しみの一つであったことがうかがえます。

※発火演習：鉄砲に火薬だけを込め、実弾は使わずに空砲を撃ち合う模擬戦闘の演習のことです。

【主な参考文献】

『栃木県史 通史編六 近現代一』(栃木県、一九八二年)

栃木県立宇都宮高等学校『百年誌』

(栃木県立宇都宮高等学校創立百周年記念事業実行委員会「百年誌」編集委員会編、一九七九年)